

新版 雪氷辞典

公益社団法人 日本雪氷学会編（古今書院）

植松 康*
Yasushi Uematsu

日本雪氷学会が創立50周年を期に「雪氷辞典」を出版したのが1990年であり、雪氷研究者は勿論、初学者の座右の書として利用され、はやくも四半世紀が経過しようとしている。この間、リモートセンシング技術やX線CTなどの計測技術は飛躍的に発達し、雪氷の物性や地球環境へのインパクトなど、雪氷研究も大幅に進歩した。昨今では、地球環境に及ぼす温暖化の影響がボディブローのように効き、このままだと人類存亡の危機も懸念される。2014年2月の関東甲信地方を中心とした大雪のような異常気象が頻繁に発生するようになったことも温暖化の影響と言われている。温暖化の影響を真っ先に受けるのが雪氷であるが、一方で地球環境の維持にとって最も必要な働きをするのも雪氷といえる。従来の「物性」から「環境」へと雪氷研究のパラダイムがシフトしてきているようである。そのような中、今般「新版 雪氷辞典」が出版された。

足利工業大学の牛山泉学長の調査によれば、万葉集に詠まれた気象現象は、多い順に風、雪、雲、雨である。古今和歌集では、風、雪、露、霞の順だそうである。当時の文化の中心が京都や奈良など関西地方であったことを考慮すると、雪は人間に大きな心理的インパクトを与えるものであったことは間違いない。青森県の三内丸山遺跡に見られるように、雪国には早くも縄文時代に豊かな生活と文化が形成されていたようである。確かに、雪は人間に多くの恵みをもたらしてくれる。雪氷研究は「物理学」の分野を越え、工学・社会科学へと翼を広げている。今回の改定で、採録された項目が初版の1.5倍程度になっているのはこのような学問領域の広がりを反映したものである。ぱらぱらと捲ってみると、「かつ

ちんこ」、「鯽(ぶり)おこし」、「中門造り」などの項目が目をひく。挙句の果ては「雪合戦」「雪女」まで含まれており、雪が私たちの生活に如何に密接に関係していたかよく分る。

筆者は小学校中学年の頃、当時流行った百科事典を両親に買ってもらった。12冊ほどのもので、結構高価なものであったと思う。学校の授業で分らないことを調べたり、夏休みの自由研究などで利用したりしたが、調べようとする項目に辿りつく前に「おやっ！」と思う項目に出くわし、そこで足踏みすることも多かった。日曜日など暇な時にぱらぱらとページを捲って眺めることも多かった。普通の本は、大抵最初から読んでいかないと理解できないが、辞典はどこからでもアクセスできる。1つの疑問が次の疑問を生み、調べていくうちに様々な知識を得ることができる。単に用語を調べるだけでなく、そういう楽しみ方も辞典にはある。最近、分らないことがあると研究室の学生に聞くことがある。そうすると、学生はインターネットでさっさと調べてくれる。インターネットは大変便利なツールであり、私もよく利用する。ストレートに回答を示してくれるが、そこには思わぬ発見はない。

昭和56年豪雪の後、「雪氷」は自然科学の枠を飛び出して社会科学の領域に研究対象を広げた。雪問題はサイエンスだけでは解決することができず、工学的アプローチが不可欠である。そういった問題を解決し、安全・安心、そして豊かな雪国のまちづくりを目指して発足したのが日本雪工学会である。日本雪氷学会でも、それまでは雪氷の物性に関する研究が主流であったが、次第に工学的・社会科学的研究が多くなってきた。そこで、最近では両学会が共

* 東北大学大学院工学研究科

同で研究発表会を開催し、情報交流の場としている。日本雪工学会の会員は工学畠の人が多いが、雪問題を解決するためには「相手」をよく知ることが大切である。そのためにも、本書は有用な知恵袋になるものと期待される。最後に1つだけ不満な点を挙げる。例えば、前述の「鰯おこし」であるが、その項を引くと「→冬季雷」となっている。そこで「冬季

雷」を見ると詳しい説明が載っている。しかし、その中には、なぜ「鰯おこし」という言葉が使われているかの説明はない。およそ雷とは関係ない「鰯(ぶり)」がなぜ使われているのか、筆者も含めて疑問に思う人は少なくないであろう。次回の改定ではこのような点にも配慮が欲しい。